

佳作

夏つづく

奈良県 奈良市立富雄南中学校一年 服部 晴空

私は、八月五日から二泊三日で合唱団の合宿として、奈良県の吉野郡川上村へ行きました。初めて訪れた川上村は、私の住んでいる奈良市とは別世界でした。村の中心を流れる吉野川の川岸いっぱい広がる吉野杉や桧が、夏の太陽をたくさん浴びて鮮やかな緑色に輝いていました。青い空と森林の緑、そして夜は満天の星に包まれている、自然にあふれている村でした。

合宿の目的は、川上村の夏祭りでコンサートをすることでしたが、私は村のコンシェルジュの佐藤さんが案内を下された「水源地の森ツアー」を一番楽しみにしていました。「水源地の森」は、川上村が天然林をいつまでも残すために十億円で購入した森で、面積は七四〇ヘクタールあるそうです。川上村は、その自然を壊さないためにも、森に入る人

を制限して大切に守っています。草が生い茂り、ドロドロの土だらけの道を抜けてたどり着いた森は、ブナ、トチ、モミの木などの樹木に囲まれていて、清らかで美しい川の水音をひびかせていました。その中でも、トガサワラという木は、「生きた化石植物」と呼ばれていて、約十ヘクタールに広がり、国の天然記念物に指定されているそうです。私は、スケッチをしたり俳句を作ったりしました。

私は、この森にあるこの水が、吉野川や遠く離れた和歌山県の紀の川の源流となっているのだと思うと、とても不思議な感じでした。

源流の水は、足首までの深さで冷たくて透明でした。アマゴやアメンボ、オタマジャクシ、カエルなどが見られました。森には、トンボやヤマビル、野生のシカがいました。奈良公園で見慣れているはずのシカでしたが、野生のシカはとても大きくて細くてすばやい動きで険しい森に入っていました。さらに上流に行くと、森が深くなり、辺りは暗くなっていきましたが、水の透明度はどんどん高くなり、源流の水を飲むことができました。今までには飲んだことのない味がして、体や心が浄化された気持ちになりました。

私は、一滴の水が生まれるには何十年も何百年もかかることを知りました。ひとしずくの水が、小さな川となり、大きな川となり、海になり、海の水は太陽の光を受けて蒸発し、雨になります。そして、又、雨は森の中の落ち葉のじゅうたんにしみこみ、すき間に入りこんで、森の体積の半分はろ過され、きれいでおいしい水になるそうです。森林は、おいしい空気をつくり、災害や地球温暖化を防止したりします。水や森林を守るために私にできることは、きつい洗剤を使わないことや食べ残しをしないことなどという小さなことかもしれないけれど、意識してみようと強く感じました。

私は、川上村の大自然を目の当たりにして幸せな時間を過ごせたことをとても誇りに思いました。